

文語日記 甘酒と柏手^{かしはで}

谷田貝常夫

平成二十四年八月十一日

晝食のメニューウに甘酒あるを見て、洗足池辨財天における放生會^{はうじやうゑ}のこと思ひ出せり。

勝海舟、池上にて西郷隆盛と江戸開城につき會談せし折、洗足池に立寄り、その風光の明媚なるを殊のほか賞で、晩年別墅を作りて住みしほど氣に入りたり。池畔に勝海舟夫妻の墓現存することも今や風光の一部になりたり。

その直ぐ近くに朱塗りの小さき辯天堂あり。嚴島辨財天を勸請せしものにて、五月二十七日に放生會を催すと聞き及びて當日洗足池に赴けり。

そも捕へたる鳥魚を元の栖に返す放生會は、佛典に作善^{さぜん}の行ひとして奨められ、ために各地に放生池のあるは存じをりたり。奈良「西の大寺の柳蔭みどり子のゆくへ白露の」と謠曲百萬に出て來るは放生池のほとりのこと、嵯峨の天龍寺は入口すぐに小さき蓮池のありて、大きな池のあるにもかかはらず、そが放生池なるを不審としたることなど印象に残りをり。さはあれども、放生會なる儀式に立會ひたること嘗てなければ、興味大いにそゝられたりき。

常には閉ぢられたる御堂の扉開けられ、始めて辯天像を拜むに、遠目ながらに彩色豊かに中々の作なり。同じ池畔の千束八幡宮よりの神主祭式を仕切り、祝詞奏上、挨拶などの後、小さき竹の鳥籠に手を入れて小鳥をつかみ、空に放つこと二羽、瞬時に鳥の影見えずなりぬ。

次に神主、池に向ひてバケツより柄杓に入れたる鯉を池に放ち、續いて多くの人々、大小の容れ物より金魚その他、様々の魚を池に入れる。

その後、甘酒の榮養豊富なること、身體を淨めることより我々は毎朝甘酒を服するが、洗足池の淨化にも役立つとの説明ありて後、甘酒撒かる。

あちこちに名前の札見らることより、この會を主催せるは解脱會なる宗教團體なりと漸くに理解せられたり。辯天堂の前にしつらへられたる天幕に坐れる百人あまりの人々がその信者ならむ。長老を始めとして次々と禮拜行はれたれど、その折ふと違和感感じたるは何ゆゑと思ひ返すに、柏手が四回叩かれたることその理由なりと氣付く。通例なれば二回のところなり。されど更に思ひかへせば出雲大社にての禮拜は柏手四回なり。ほとんどの神社、今は神前に「二拜二拍手一拜」と書かれての形式を強要すれど、曾てはかかる規定無きことなり。月詣りに二拍の如何にも簡略に過ぐと物足らざる思ひありしが、試むるに四拍せば何か心に満たさるゝところあるを覺ゆ。

甘酒と四拍を再評價せられたる放生會なりき。

